

聖書：マタイ 12：1～8

説教題：安息日の主

日時：2019年5月26日（朝拝）

今日の箇所では安息日の問題が扱われています。安息日については十戒の第4番目の戒めとして、出エジプト記 20 章でこう命じられています。「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。・・・それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。」ユダヤ人はこの戒めに基づき、彼らなりの解釈で、安息日はこのように過ごすべきだという考えを持っていました。それは彼らの生活に根付いて一つの伝統となっていました。ところがイエス様のあり方は彼らの考えとかなり異なっていました。そのためにパリサイ人たちはイエス様と激しく衝突します。

今日の箇所です。弟子たちは安息日に麦畑を通った際、空腹のために穂を摘んで食べ始めました。問題は他人の畑から取って食べたことではありません。それはイスラエルの律法で許されていました。それは貧しい人々に対する配慮の取り決めです。パリサイ人たちが問題にしたのは、これを安息日に行なったことです。彼らによれば手で穂を摘むことは刈り取りに当たり、手でもむことは脱穀作業、もみ殻を除くことは吹き分けに当たりました。これらは立派な仕事である。どんな仕事もしてはならない日にあなたの弟子たちはそれをした！とパリサイ人たちはイエス様を非難したわけです。

これに対してイエス様は 3 つのことをもって答えられました。一つ目は 3～4 節のダビデの例です。I サムエル記 21 章に記されていますが、ダビデがサウルから命を狙われて、持つものも持たずに逃亡生活を始めた時、ひもじくて祭司のところに行き、本来は祭司しか食べてはならないパンを食べたことがありました。律法の文字だけを見つめれば立派な律法違反です。しかし彼はそのために断罪されたのでしょうか。あの箇所の前後を読むと、そういうことは書いてありません。彼が後にそのことのために神から懲らしめを受けたとか、彼がそのことを悔い改めたというようなことは書いてありません。つまりあれは神が容認あるいは承認したもうところであったということです。そこに示されている真理は、神はある人が差し迫った必要のもとにある場合には、ご自身が定めた律法をわきに押しやることもあるということ。律法はもちろん守るべきものとして与

えられています、困っている人が現にそこにいるのに、緊急の助けを必要としている人がいるのに、その人を無視して、とにかく律法は絶対に守られるべしと主張し、その人を見殺しにするような仕方で適用されるべきではない。これはそのままこの時、空腹の状態にあったイエス様の弟子たちに当てはまるものでしょう。

2つ目は5~6節の宮にいる祭司の例です。パリサイ人たちはイエス様の弟子たちを見て、安息日に仕事をした！と言って責めましたが、安息日に働いても罪にならない人たちがいました。イエス様がここで取り上げている祭司たちです。彼らは宮の礼拝のために休むわけにはいきません。律法には安息日にいけにえをささげるべきことが規定されていますから、彼らはその日も働きます。とすると彼らは安息日を汚していることになるのか。そうではありません。宮の働きは優先されます。このことを踏まえてイエス様は6節で言われます。「あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります。」この「宮よりも大いなるもの」とは何のことなのか議論はありますが、一般的にはイエス様ご自身を指していると思える人が多いと思います。宮あるいは神殿は神が私たちとともにいてくださることの象徴として用いられて来ましたが、それはイエス様を指し示すものでした。実際、イエス様は度々ご自身を神殿にたとえられました。そういう意味でイエス様は宮が指し示す本体すなわち宮より大いなるものです。言いたいことはこういうことでしょう。もし宮が宮に仕える者たちを安息日の汚れから守り、その規定に優先させる力を持つなら、宮より大いなる方であるイエス様にはなおさらその権威があるということです。イエス様はご自分のもとで仕える者たちを宮以上の力をもって、その汚れから守ることができる。

3つ目は御言葉を通してです。7節：『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』とはどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、咎のない者たちを不義に定めはしなかったでしょう。」これは旧約聖書ホセア書6章6節からの引用ですが、実は前にもイエス様はこの福音書の9章13節で引用しておられました。やはりパリサイ人たちに対してです。ここの「真実の愛」という部分には印がついていて、欄外にあるいは「あわれみ」とあります。この「真実の愛」「あわれみ」が、「いけにえ」と対比して述べられています。一方は内面の思いを指し、もう一方は目に見える儀式や規定を代表します。本来この両者はセットです。愛や憐れみという内面の思いの現れとして、いけにえをささげるという外面の行いがなされるわけです。しかし往々にして私たちは外側の目に見える儀式にのみ満足して真に大切な愛や憐れみを疎かにしてしまいがち。

そのような本末転倒の状態を前にして、神は「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない。」と言われました。どちらも大事ですが、どちらがより重要かと言えば、断然、愛である、と。もしこの御言葉をパリサイ人たちが本当に知っていたなら、彼らもそちらを大事にしたでしょう。しかし彼らは儀式的なことを表面的に守るのみで、自分たちと同じようには行動しない人を見て、冷たく糾弾するのみ。これは彼らが「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない。」と言われる神ご自身と本当の意味ではつながっていないことを示しています。彼らは自分たちは神を礼拝していると主張しながら、本当の意味では神を礼拝していないし、むしろその思いは神から遠く離れていた！ということになるわけです。

さて以上のイエス様の言葉を私たちはどう受け取ったら良いでしょうか。さらっと読むと、この箇所は安息日の律法はそんなに堅く守る必要はないと言っているようにも見えます。いけにえより真実の愛が大事だから、律法の細かい規定や儀式はそんなに大事ではない。ほどほどで良い。安息日もそうである。そのようにイエス様が仰っているように読めなくもありません。しかしもちろんイエス様はそういうことを言おうとしているわけではありません。前に5章17節でイエス様はこう言われました。「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」 また言われました。「まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。」 ですからイエス様はここで安息日の律法を廃棄しようとか、この戒めをいくらかでも割り引いたものにしようとしておられるわけではありません。イエス様がしようとしていることは、安息日に関する当時の誤った理解と適用からこの日を救い出すことです。この日が神の御心に十分に沿って成就すると言える日にすることです。イエス様は最後の8節で「人の子は安息日の主です」と言われましたが、これも今の線に沿って考えられるべき言葉だと思います。もしイエス様が少しでも安息日を弱める方なら、ご自分を「安息日の主」とは言われなかったと思います。この表現をイエス様が使っておられるのは、イエス様が安息日の意義を十二分に実現される方だからです。安息日の祝福を私たちの上に豊かにもたらし、それを成就させてくださるお方だからです。

安息日を考える上での基本は、これは創造の時に神が定めたものであるということです。神が6日間働いて7日目に休まれたように、神のかたちに造られた人間も、神にならって6日間働き、7日目に休むようにとされています。神は6日間で世界を創造さ

れた後、ご自身が造られた世界を見て「見よ、それは非常に良かった」と心から喜び、満足されました。そして休まれました。その神の喜びと満足に私たちもあずかるのです。神と交わって深い安息に生かしていただくのです。しかしこの祝福された関係は人間の罪によって破られてしまいました。神と人間の間には断絶が生じて、人間は造り主なる神の内に憩うことができなくなりました。人間存在にとって最も必要な根本的な休み、あるいは安らぎが得られなくなりました。人間は心にぽっかり穴の開いたところを他のもので満たそうとしますが、神が満たすべきところを他のもので補うことはできません。そんな私たちをその悲惨と滅びの状態から救い出すために御子イエス様が来てくださいました。イエス様はその地上の生涯と十字架の犠牲を通して、神の前における私たちの罪が赦されるようにしてくださいました。この方により頼むことを通して、私たちは神との関係を回復され、神の内に憩うという最も必要な休みを再び得る者とされます。前回 11 章 27 節でそのことを見ました。父なる神と御子キリストは互いに深く、完全に知り合っていますが、私たちは御子を通してその父なる神を知る祝福へ導かれることができる。そのための唯一の道なる方として、イエス様は「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と言われました。この休みとは、私たちが父なる神のもとに憩うことによって与えられる休みあるいは安らぎのことです。こうしてイエス様は私たちに安息の恵みを回復させてくださいます。またイエス様は律法を廃棄する方ではなく、成就するために来た方として、安息日の本来の恵みが十分に私たちの上に成就するように導いてくださいます。このような意味でイエス様は「安息日の主」なのです。ですから私たちはこの日の祝福に生きようとするなら、この「安息日の主」なる方のお言葉に聞かなければなりません。この方こそ、この日の上に主権を持ち、この日の祝福を神の御心にかなう形で私たちにもたらしてくださる方なのです。

さて私たちはこの「安息日の主」なるイエス様の言葉の前でどうでしょうか。私たちもパリサイ人のような傾向が自分の内にあることを思わされるのではないのでしょうか。イエス様を信じて安息日の祝福に生かされている自分であるはずなのに、イエス様に同じことを言われてしまうのではないかと感じる。もし私たちが今日の礼拝をただ形式的に守り、私は神の命令に従ったと言って満足し、一方でそうでない人たちを断罪するとしたら、同じ過ちを犯していることになります。そしてイエス様から「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない。」と言われるのではないのでしょうか。神は外側のことよりも内側のものを見えています。神は愛や憐れみを大事にしておられます。その

方の前で、私たちは自己点検したいと思います。私はただ形式を行って自己満足していることはないか。「わたしはあわれみを喜ぶ」と言われる神を本当に見上げて、礼拝しているか。もし私たちがそのような神を礼拝し、その神と生きてつながっているなら、そのことは私たちの他の人に対する態度にも現れて来ることでしょう。困っている人、助けを必要としている人への愛や憐れみの行動に現れるでしょう。私たちがこの礼拝の後に周りの人々にどう接したかによって、私たちはこの神を本当に礼拝し、その交わりに生かされたのかが試されることになるのです。

一方で愛や憐れみといった内面のことが大事だからと言って、逆に形式を投げ捨てたり、安息日を軽んじる誤りに行かないようにも注意したいと思います。ある人は安息日の律法は今日に当てはまらないのではないかと考えますが、考慮して良いことは、これは十戒の中の一つの戒めであるということです。私たちは果たして十戒の他の戒めは、今日は無効であると言うのでしょうか。「あなたにはわたし以外に、ほかの神があってはならない」という第1戒。あるいは「殺してはならない」「姦淫してはならない」「盗んではならない」という第6戒、7戒、8戒、・・・。そのように言うクリスチャンはいないと思います。とすると第4戒だけが今日に当てはまらないと言える根拠は何でしょうか。そのことをもう一度考えて見なければなりません。またこれは「自由」という問題を私たちが誤って捉えるところからも発生します。神の律法は私たちに自由を与える律法です。私たちがそこに歩む時、そのように造られた人間としての本当の自由を私たちは経験します。逆にそこから離れることは自由ではなく、罪の奴隷状態にあることです。神は私たちに自由を与える律法として、この安息日も与えてくださいました。またイエス様は律法を廃棄するためでなく、成就するために来てくださいました。私たちは安息日の主に導かれて益々この安息日により良く生きる者とされたいと思います。主が十字架と復活を通して勝ち取ってくださった安息を、この週の初めの日にまず豊かに味わい、神の内に憩うて、神から安らぎと力を得る恵みの道を歩みたいと思います。

そしてこの安息日はやがての究極の安息を待ち望むものでもあります。Ⅱペテロ3章13節：「しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」 最終的な安息は私たちの行く先に備えられています。一週ごとの安息日は、この天に備えられている安息の前味を味わい、それを先取りする日でもあります。私たちは神が定めてくださった安息日を感謝し、週ごとに神の憐れみを新しく経験し、それを隣人との関係にも現し、いよいよ最後の究極の安息を目指す主の民の幸いに

生かされて行きたいと思います。